

海賊王と開かずの《門》

海賊と女王の航宙記

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

アントニー・ルッジエロ・ディアスは上機嫌で酒杯を傾けていた。

適度な照明が薄暗い店内をほのかに照らし出し、銀盆を捧げ持った黒服の男たちが、気取った仕草で広い床をすべるように行き来している。

ディアスはその様子を透き通った有機硝子越しに眺めていた。

ここはいわゆるナイト・クラブである。

ディアスが今いるのはVIP用の特別室だった。

贅沢な内装で、酒もつまみもかなりの値段である。

壁際の長椅子に陣取るディアスの両脇には、化粧も衣裳も艶やかな若い女たちが四人も侍っている。

右側に座った女はディアスの肩にしなだれかかり、

左側の女はディアスに密着して、さりげなく自分の胸を押しつけるようにしていた。

このことから、それほど上流の店ではないことが見て取れる。

夜の社交場と言われるほどの高級倶楽部になると、ホステスも超一流だ。こんなはしたない振る舞いは断じてしない。極端な話、手を握らせることもない。客のほうもそれを心得ていて、知的な女性たちと機知に富んだ会話や駆け引きを楽しみに行くのだが、ディアスはそれではおもしろくない。

「眼の前に美しい花が咲いているのにその蜜を吸うことができないなんて、どんな我慢大会だ？」

と平然と言い放つ男である。

彼はまだ三十代の若さで、二メートル近い長身に浅黒い肌の堂々たる美丈夫である。

貧相な中年男と違って、自分は女にもてるという強烈な自負があるのもわかる。

だが、残念ながら、こうした店で働く女性たちの

客に対する価値基準はただ一つ。

『金を持っているか、持っていないか』のみだ。

持っているなら、それを『どのくらい自分たちに使ってくれるのか』がもつとも重要だ。

水商売で鍛えた彼女たちの商売勘は確かなもので、客の男がどんな性格か、どのくらい財力があるのか、どんな『おねだり』が功を奏すのか、的確に見抜く。彼女たちがディアスに下した評価は『ちよろい』という簡素なものだった。

（この客は女に弱い。賢くもない。ちょっと甘えてみせればいくらでも引つ張れる）

左隣に座っている黒髪の女性がディアスの太股を撫でながら、猫なで声で話しかけた。

「ねえ、二代目」

ディアスが、自分は二代目社長だと名乗ったので、女性たちは彼をこう呼んでいる。

彼の母国のブラケリマでならディアスを知らない人間を探すほうが珍しいが、ここはブラケリマから

七十光年も離れたチネリ宙域にある宇宙施設だ。

CFU1という正式名称があるが、『プリモ』の通称で呼ばれている。

家族連れが楽しめる高原や海岸の風景を再現し、子どもが遊べる施設なども豊富に用意されているが、大人向けの夜の街も充実している。

互いの区域は重ならないように配慮してあるから、男性客も安心して訪れることができるわけだ。

「今度、お店の外で会いましょうよ。ラ・ロッカの今期の新作がとつてもすてきな」

ラ・ロッカは香水から高級宝飾時計まで手がける女性向けの有名商標である。

その商品を持つことは一種の社会的地位の証明だ。右側からしなだれかかる金髪美人も負けていない。

「あらあ、それならわたしもデュフォンの腕時計が欲しいわ」

ラ・ロッカに負けず劣らず有名な商標である。残る二人の女性たちも欲しいものを口にした。

「えこひいきはだめよ、二代目。それならわたしに

リンクスのコートを買ってくれないと」

「それじゃあ、わたしはルズカのバッグね」

彼女たちの注文はどれも決して安くはない。

全部合わせたら一千万近くになるが、ディアスは

笑み崩れながら、両脇の女性たちの肩を抱き寄せた。

「可愛いことを言うじゃないか。いいとも。何でも

買ってやるよ」

「ほんと?！」

「嬉しい!」

女たちが嬌声きようせいをあげてディアスに抱きついた。

「あたしたち全員にこんなに買ってもらうなんて、

何だか悪いみたい」

「二代目はお金持ちなのねえ」

「親父が遺産を残してくれたんでね」

遺産と聞いた女性たちが眼を光らせて情報収集に

取りかかろうとした、その時だ。

黒服の支配人がそっと部屋に入ってきて、丁寧ていねいに

頭を下げた。

「——ディアスさま。当店をご贖員ひいきにいただき、

ありがとうございます」

支配人が直々じきじきに、馴染みの上客に挨拶あいさつに来る。

こうした店ではよくある光景だ。

加えて上客を繋ぎ止める努力も怠らない支配人は

愛想よく笑いながら言ってきた。

「新しい女が入ったので、お目に掛けたいのですが、
連れてきてもよろしいでしょうか?」

「おう、もちろんだ」

一流の店と客なら、贖員の接客係ホステスを一人に決めて
通うものだが、ディアスはそういうタイプではない。

次から次へと新しい女が欲しいという男だ。

要するに『手当たり次第』である。

一礼して下がった支配人が女を連れてくる様子が
透明な壁越しに見えた。

うつむき加減に歩いてくる女の顔は薄暗い照明が
邪魔をしてはつきりわからない。ただ、黒服の男が

小さく見えるほど背が高かった。

頼りない灯りにも魚の鱗うろこのような金属光沢を放つ衣裳が反射して、きらきら輝いている。

お世辞にも細いとは言えない身体つきの女だ。

身体にぴったり合わせた赤の衣裳は、そんな女の均プロポーション整をくつきりと際だたせていた。鍛えられた

引き締まった肉体ながら、胸も腰もたつぷりと量感

豊かで、実に肉感的である。服飾ファッションモデルではなく

フィットネスジムの広告塔のほうが似つかわしい。

そのくらい見事な、彫刻ちやうこくのような肉体だった。

胸元にも手首にも豪華な装飾品ごうしゃ アクセサリーが光っている。

華やかな女性が好みのディアスはにやけていたが、

なぜかその大きな姿に見覚えがあるような気がした。

「失礼します」

VIP室に入ってきた女の顔を見て、ディアスは

眼を剥むいた。言葉が出なくなった。

女のほうは硬直したディアスの表情にはまったく

構わず、にやりと笑って言ったのである。

「やあ、二代目。また会えて嬉しいぞ」

どう間違つても接客係ホステスの口調ではなかった。

燃えるような髪を婀娜あだつぽく結い上げ、金の鎖を

その髪に飾りに巻きつけ、くつきりと艶やかな夜の

化粧をしたジャスミンはディアスの面協めんぎょうの女たちに

向かつて厳然げんぜんたる口調で言った。

「お嬢さんたち。遠慮してくれ。この男はわたしの

客なんだ」

四人の美女はちよつと顔色を変えた。

突然現れた新参の女が上客を横取りするのかと、

不快に感じるのは当然だが、同時に怯ひるんだ。

女の口調は身の程知らずな新顔せんぱいが先輩に生意気な

口を聞くのとは明らかに次元が違っていたからだ。

それを裏付けるように、黒服の支配人が女たちを

促うながしたのである。

「さあ、みんな。後はこの人にお任せしなさい」

こう言われては留まることもできず、女たちは皆、

立ち上がって部屋から出て行った。

硬直していたディアスはここで息を吹き返して、

ジャスミンに向かって叫んだのである。

「冗談じゃないぞ！ 今すぐ出て行け！ おまえが出ないなら俺が帰る！」

二度と見たくなかった顔だった。近くにいるのも耐え難いのに、赤いドレスのジャスミンはびくともしない。不敵に笑って言い返してきた。

「それは許可できないな。あんまりつれないことを言うもんじゃない。昔なじみがわざわざ会いに来てやったんだから、感謝して然るべきだろうが」

この口調をありがたがれる肝の太さがディアスにあるわけもない。黒服の男に向かって叫んだ。

「支配人！ この女を今すぐつまみ出せ！」

しかし、支配人は動かない。

代わりに薄暗い店内から男が歩いてきて、笑顔でVIP室に入ってきた。

「お呼びかい？」

再度、絶句したディアスだった。

これまた二度と会いたくなかった顔だった。

ディアスの眼の前の支配人より遥かに体格がいい。しかも、憎らしいほどの男前である。

日頃はくだけた服装が多いケリーだが、正装したジャスミンに合わせて今は黒の礼服を着ていた。

一見すると先程の支配人と大差ないジャケットに見えるが、質も仕立ても大違いである。

そのジャケットの襟を整えて、ケリーは言った。
「俺は正真正銘、この店の支配人だぜ。ついさっき権利を買い取ってきたんでね」

耳を疑ったディアスだった。ここは《プリモ》の歓楽街の中でも繁盛している大きな店である。

買うとなれば億単位の金が必要になるはずだが、ジャスミンが平然と続けた。

「それもこれも、おまえに少々込み入った話があるからだ。——外してくれ」

ジャスミンの視線を受けて、前支配人は如才ない笑みを浮かべて一礼した。

「それでは、ごゆっくり」

ディアス、ジャスミン、ケリーがVIP室に残り、ジャスミンが壁の端末を操作する。透明だった壁にたちまち色がついて黒い壁になった。

これで、この室内の様子は外からは見えない。

ジャスミンは大腿に歩いてディアスの隣に座った。

反対側はケリーが占めた。

ディアスは逃げられない。

彼の本心としては逃げ出したかったに違いないが、

二人の気配がそんな真似を許さないのだ。

自分と同じくらい大きな体格の夫婦に挟まれて、

ディアスは硬直していることしかできない。

ジャスミンは単刀直入に用件に入った。

「公おおやけにはされていないが、先日《テンペスタ》でちよつとした事件が起きた。中央管制室に不審者が侵入したんだ」

ケリーがのんびりと続ける。

「本当は全然『ちよつと』してないけどな」

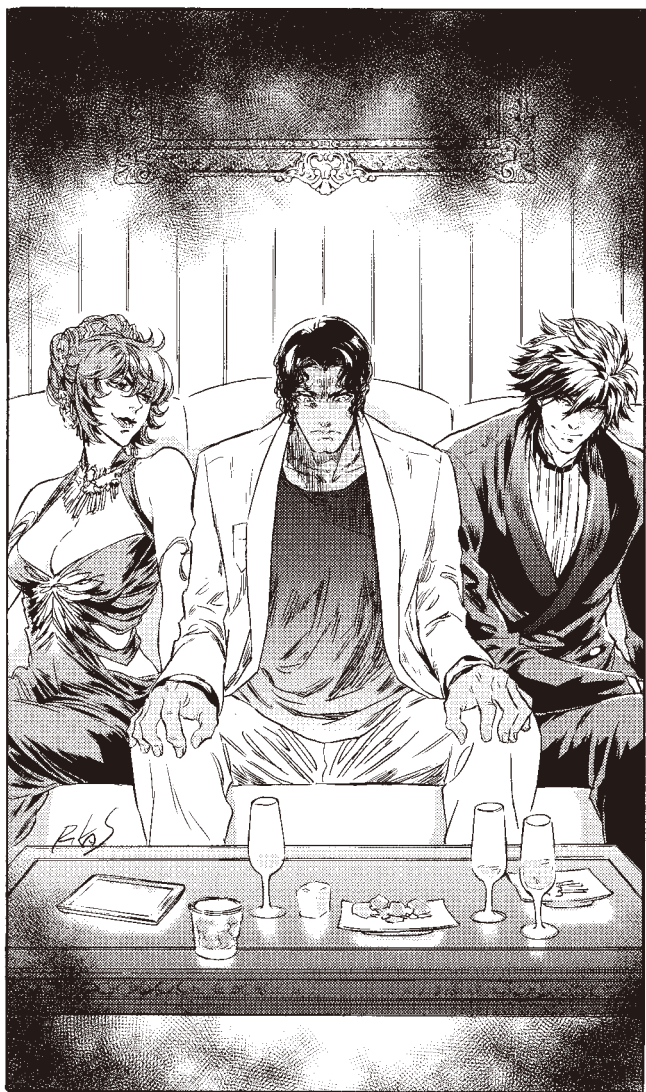
「そのとおりだ」

ジャスミンは頷うなずいて、

「何より問題になったのが侵入手段だ。言うまでもないが、《テンペスタ》の中央管制室に入れるのはごく一部の限られた人間だけだ。そこで資格を持つ職員を全員、取り調べたが、手引きをした者は誰もいないと結論づけられた。当然だな。あの管制室はパスワードパスワードや票鍵カードキーで入れるわけじゃない。生体認証は本人のみ有効で、常に複数での勤務が義務づけられ、室内から認証を解除する際には他の管制官の許可が絶対に必要ときている。しかも侵入者は四人もいた。内通者がいたとしても、その内通者一人で四人もの不正認証を認めさせるのは事実上、不可能だ。では複数犯かという疑惑も生じたが、綿密な調査の結果、この可能性も完全に否定された。それなのに現実に入人を許した。——変な話だろう？」

ディアスの隣でジャスミンは大胆に足を組んだ。

深紅の衣裳には深い切れ込みが入っているので、



足がほとんど丸見えになる。

いつものディアスなら眼が釘付けになるはずだが、今の彼はひたすら視線を泳がせている。

両脇にいるジャスミンのこともケリーのことも、いどてき意図的に見ないようにしているのは明らかだった。

逆にジャスミンの灰色の眼もケリーの琥珀こはくの眼もディアスの顔を正面から捕らえて放さない。

ジャスミンが言う。

「《テンペスタ》はもともとブラケリマの大実業家、キエザ氏の所有物だった」

それはディアス本人が生まれる前のことなので、確認する意味でケリーが続けた。

「亡くなる間際に、氏は《テンペスタ》をおまえの父親に譲渡したんだって？ 太っ腹な後援者パトロネだな」

「氏は《テンペスタ》を飛翔機フライヤーの試験飛行場として使ったが、同時に個人的な保養地リゾートとしても活用した。いふなれば巨大な別荘だ」

「購入当時でも半径一・五キロメートルだからな。

別荘と言うには少々規模スケールが違いすぎるが、どんどん

増築して今じゃあ直径十キロメートルだ。それでも、個人の持ち物には違いない。だったら何か所有者オーナーの証あかしのようなものを持つていてもおかしくないよな。

——たとえば、《テンペスタ》の鍵かぎとか」

ディアスは傍目はためにも挙動不審だったが、二人ともそれには触れず、ケリーが話題を変えた。

「俺たちはカミツロ小父おじさんにも会って話を聞いた。おまえのことを心配してたぜ」

ジャスミンが補足する。

「無論、それ以上に呆あきれていらつしやるが」

「そりゃあ、これからは心を入れ替えて、カミツロ小父さんの工場で真面目に働きますっていう約束を一日で破つて逃げ出したんじゃないやあ、いくら温厚な小父さんでも怒るだろうよ」

ケリーはさもありなんと頷いて、ディアスを見た。
「だがなあ、小父さんはちょっぴり感心もしてたぜ。
——カミツロ小父さんはおまえが社長を解任された

ことをしばらく知らなかったんだってな？」

ジャスミンがおもむろに頷いて言う。

「ブラケリマの身内主義にも困ったものだ。いや、秘密主義かな。国内でも知らぬ者のない有名な企業の経営者が替わったら普通は告知公表するものだぞ」

ケリーが混ぜっ返した。

「よく言うぜ。その記者会見を受けるのがいやで、さっさと出国して行方不明になった張本人が」

「仕方ないだろう。わたしは人目に立ちたくない」
嘆かわしげにケリーは首を振った。

「そいつは……、どうあがいても無理つてもんだぜ、女王」

元々の迫力と存在感だけでも半端はんぱではない人だ。

加えて、現在のブラケリマで、ジャスミンの別名『パピヨンルージュ』は誰もが知る超有名人ビッグネームである。

ケリーはその点を茶化してみせた。

「その理屈りくつで言うとか、ディアス社があんたのことを黙っていたのは都合がよかったんじゃないか」

「否定はしない。世間一般に大々的に公表されてはたまったものではないが、大事な取引先にまで何も言わないというのはいかがなものかと思うぞ。無論、いくら黙っていたところで、こんな話はすぐに外に洩もれるわけだが……」

「だよな。実際、カミツロ小父さんは、部下たちが雑談しているのを偶然、耳にして、おまえの解任を知ったらしいぜ」

「そんな非正規経路ルートで、社長の交代が取引先の耳に入るなんて、大失態もいいところだ。仮にも商売をする以上、筋は通すべきだろうが」

共和宇宙一大成功した商人を父に持つ女王さまはなかなか厳しいことを言うが、正論である。

ケリーは苦笑しながら、やれやれと首を振った。

そうして彼はまだ笑みを残した、しかし鋭い眼をディアスに向けた。

「おまえ、親父さんの遺品を一般人は参加できない高額競売オークションに出品したんだってな？」

「……何が悪い？」

ディアスはふんぞり返ったが、あまり反り返ると反対側にいるジャスミンにぶつかってしまう。

背後を気にして、ほどほどえらそうに胸を張ってみせるという技巧を駆使して、ディアスは断言した。

「あれは今は俺のものなんだぞ」

「普通ならその通りだろうが、そこでブラケリマの身内主義が問題になるのさ。おまえの親父さんは、史上最強と謳われた峡谷飛翔士だった。引退してもうずいぶん経つていうのに、未だに親父さんの熱狂的な鼻肩が大勢いるそうじゃないか」

ジャスミンが続ける。

「——そんな立派な人物からなぜこんな出来の悪い馬鹿息子が生まれたのか理解に苦しむが、とにかくブラケリマではそうした有名飛翔士の私物や遺品は家族や遺族が管理して手放さないのが普通らしいな。——それが競りに出された。しかも出品されたのがビッグ羊の紋章が燦然と胸に輝くビッググホーントーニ

愛用の飛行服ときたものだから、さあたいへんだ。たちまち天井知らずに値段が吊り上がった」

「親父さんはよっぽど大角羊が好きだったんだな。

ディアス社の社章もそれだし、整備服にも大角羊の紋章が刺繍されてる。まさか、昔の出走者名まで大角羊とは思わなかったが……いや、こいつは逆か。現役時代その名前で活躍してたから、あえて社章に使ったのかもしれないな」

ケリーは半ば感心し、半ば呆れた口調で言った。

「それにしたって、たかが服一枚にうん千万だぜ？ たまげたね」

「その点はわたしも驚いている」

ジャスミンも真顔で頷くと、ディアスに向かって皮肉な微笑を浮かべて見せた。

「だが、競売は成立しなかった。峡谷競走協会が『待った』を掛けたんだ。——知っているな？」

ディアスは忌々しげに舌打ちしている。

低空競走の聖地と言うべきフィンレイ峡谷には

低空競走記念館という建物がある。

その名の通りブラケリマの低空競走の殿堂であり、
峡谷競走協会が管理している。

かつてのビッグホーントーニこと初代ディアス社長
アントーニ・ディアスは、自分の愛用品は死後
すべてこの競走記念館に寄贈すると約束していた。

書面は残っていない。初代と協会理事たちとの、
歓談の際の口約束にすぎない。

それで充分だったのだ。

四年前、その初代が亡くなった。

峡谷競走協会は息子のディアスにお悔やみを述べ、
生前の初代の意思を伝えて遺品の寄贈を依頼したが、
「まだ心の整理が着いていないので」

「父の仕事を引き継ぐのに忙しいので」

と、のらりくらりと躲され、未だに寄贈はされて
いなかった。

それでも協会は自分たちに権利があると、いずれ
記念館に寄贈されるものと信じて疑っていないかった。

それが知らないうちに競売に出されたのだから、
驚いたなどという段ではない。

前述したとおり、ブラケリマでは有名な飛翔士の
私物が一般人の手に渡ることは極めて稀である。

しかもディアスと同じ名前の父親は、峡谷競走の
歴史に燦然とその名を轟かせた超一流の飛翔士だ。

引退した後は飛翔機を製造する企業を興し、自ら
社長となり、優秀な機体を次々と世に送り出して、
低空競走の発展に大いに貢献した人なのだ。

まさに国の英雄である。

その人が現役時代に実際に着用して競走を飛んだ
飛行服である。

鼻肩や投資家たちが眼の色を変えて飛びつくのは
当然だったが、こんなことを見過ごせるわけがない。

峡谷競走協会はただちに競売の中止を申し入れ、
同時にどういふことかとディアスを問いつめた。

彼はまたしても何のかんと言いついに終始したが、
今度は協会も容赦しなかった。厳しく追及した結果、

「借金で首が回らなくなった」からだと言明した。

しかし、これこそ納得のいかない説明だった。

社長を退任しても彼がディアス社の大株主である事実に変わりはないからだ。配当金だけで、かなり裕福な暮らしができるはずである。

そこで調べてみると、彼はそれを上回る度合いで散財していることがわかった。

「協会は呆れたが、そこで仲裁に入ってくれたのがカミッロ・チェンティ氏だ。お父上の若い頃からの友人で、おまえのことも洩垂れ小僧の時分からよくご存じだそうだな」

「ところが、親父さんが亡くなってからというもの、おまえは小父さんを遠ざけて、一度も会っていない。ディアス社で定期的に開かれるパーティにも一度も招待していない。それどころか、故意に小父さんの名前を招待客から外させたんだってな」

「その理由をおまえの元秘書から聞いた時には……こちらまで赤面しそうになったぞ」

ジャスミンは忌々しげに唸り、ケリーも苦笑して、嘆かわしげに言ったものだ。

「あんな『ちっぽけな下請製造業の社長』なんかを招待するのはディアス社の品格に関わるんだって？ すぎえよなあ。普通はそういう相手を慰労のために招待するもんだと思ってたぜ、俺は」

ジャスミンがおもむろに頷いて言う。

「そのとおりだ。自社のために働いてくれる企業を蔑ろにするなど、経営者としてあるまじき姿勢だ。断じて許されることではないが、それ以前の問題だ。チェンティ精密機械工業は規模こそ大きくはないが、ブラケリマの飛翔機産業において絶対に欠かさない重要な企業だというじゃないか」

ケリーも真顔でディアスに確認した。

「本当に知らなかったのか。ブラケリマの飛翔機に搭載される管制頭脳は全部チェンティ社製の部品を使っているって？」

ディアスは上目遣いにケリーを睨んだ。

それがどうしたと思ってる眼だった。

一方、ケリーは脱力感も露わにしていた。

（まさかこんな初歩的なことを飛翔機フライヤーの製造会社の元経営者に言わなきゃならないとは……）

と、ありありと顔に書いてある。

「飛翔機フライヤーは特殊な乗り物だ。管制頭脳も通常の航空機とはまったく異なる性質を持たせなきゃならない。通常仕様スペックの管制頭脳では、とてもじゃないが峡谷を飛ぶことはできない。その頭脳の調整ができるのもチェンティ精密機械工業あつてこそだと聞いたぜ？あの技術は他のどんな企業にも真似はできないと」

ジャスミンも腕を組んで頷いている。

「その話を聞いて仰天きょうてんした。いや、正直なところ、腰が抜けるかと思つた。おまえが社長に就任したら、真つ先に、最大限の礼をもつて、今後ともよろしくお願いしますと挨拶あいさつに伺わなければならぬ相手だ。それを……避けるばかりか見下みくだして粗略そりゃくにする？わたしがディアス社の社員だったら、恥ずかしくて

申し訳なくて、穴を掘って飛び込むところだ」

「だよなあ……」

ケリーも全面的に同意した。

彼もかつて共和宇宙経済の頂点にいた男である。

「そりゃあまあ確かに、小父さんはおまえの会社に自社の製品を納めているわけだが……、だからってそれを下請製造業扱いするとはねえ……」

ケリーは何とも言えない生ぬるい笑みを浮かべて、頭の悪い子どもに言い聞かせる口調で言つた。

「そういうのは下請じゃなくて、最重要取引先つて言うんだぜ。ちゃんと覚えとけよ」

本当は、こんなことは会社の重役たちが指摘して、経験不足の社長を教育すべきなのだが、ディアスは自分に否定的な態度を取る社員や、耳の痛い意見を言う部下は片つ端かたはしから馘首くびにしてしまったという。

ディアス社の重役たちは身の縮む思おもいをしながら、招待状が出せないことをチェンティ氏に陳謝した。

「立派な人物だな。こんな無礼な仕打ちを受けても

氏は怒りもせず、不快感もみせることなく、むしろディアス社の重役を氣遣つてくれたそうだ。自分は根っからの技術者で華やかな席は苦手だからどうもお氣になさらず、招待は遠慮させてもらうとな」

ジャスミンは小さく嘆息し、ケリーもしみじみと言つたものだ。

「俺がおまえんところの社員で、業務命令でこんな非常識な申し出をしなきゃならなかつたとしたら、それなのにそんな優しい言葉を掛けられたとしたら——やりきれなくて無念すぎて、涙が出るぜ」

「まいったくだ。そこで、もう一つ別の疑問が生じる。おまえが怪物級の機体開発に妙に熱心だったのは、まさかと思うが、この階級ならチェンティ精密機械工業と関わらないですむからか？」

怪物級の飛翔機は管制頭脳を搭載していない。
モンスタークラス フライヤー

つまりはチェンティ精密機の製品も必要ない。

ディアスは黙っていたが、その顔を見れば答えは明白だったので、ケリーは苦笑いを浮かべた。

「ガキの時分を知られている小父さんに、あれこれ指図されるのがそんなにいやだったのか？」

「馬鹿もここに極まれりだ」

ジャスミンも忌々しげに舌打ちして続けた。

「——おまえとは逆に、氏は男氣に富んだ人物だ。こんな仕打ちをされながらもビッグホーン二の遺品が競売に出されたと知つて驚き、おまえの窮状を知つて二度驚き——何と言つても大株主だ、社長を退任しても生活に困らないはずと氏も思つていたんだらう——予想外の行動に出た」

ジャスミンは冷やかな眼でディアスを見た。

「わたしなら、おまえがどんなに困窮していようと救いの手を差し伸べたりはしない。それがおまえのためでもあるが、チェンティ氏はいささかも躊躇うことなく、おまえの借金を肩代わりすると申し出た。ご自分の私財を投じて、ひとまず期限の迫っている借金を清算し、残りは分割にして、おまえの持株の配当金で払えるように手配した」

ケリーが指摘した。

「——そこで小父さんの最初の台詞せりふに戻るわけだ。

おまえがどのくらいの借金を抱えているのか、今の資産状況はどのくらいなのかを調べて、小父さんはちよっぴり感心した。生命保険を担保にしなければならぬほどの多額の借金を背負つても、二代目は親父さんの会社の株だけは手放さなかつた、つてなけどなあ……」

ケリーは何とも言えない顔で笑い、ジャスミンは凄味すこみを籠こめた笑顔で断言した。

「どう考えてもそんなはずはないな？」

ディアスはやはり答えない。

二人も答えなど期待していなかつた。

「俺たちはおまえがよく遊んでいた賭場とばにも行つて話を聞いてきた。呆れたぜ。おまえ、十回死んでもまだ追つかないくらい負けてるよな？」

「しかも、支払いを渋しぶつた」

「いくら顔が利くからつて、付けにも限度があるぜ。

散々ぐねたあげく、その時は親父さんの持つていた不動産を渡すことで何とか収めてもらつたようだが、こんな見苦しい真似をされたんじゃあ、賭かけの胴元どうもとも、今後はうちで遊ぶのはお断りつて言うだろうぜ」

「勝つた時はいそいそと小切手を握りしめて帰り、負けた時は付けにしてくれ——ではな。その付けをきちんと回収できるのなら上客と言えるだろうが、回収の当てがないのでは話にならん」

大迫力の二人に挟かまれてゐるディアスは冷や汗を掻かいている。

「けどよ、まともな賭場を追い出されたからつて、おまえの博打ばくちの虫が治まるわけはねえよな？」

「その後、おまえがどこでどんな遊びうわさをしていたか、これがはっきりしないんだが、噂うわさでは、百回死んで生命保険を受け取つてもまだ払えないくらい派手に負けたそうだな？」

「おかしい話だ。ディアス社の株なんて、真っ先に賭かたの形に取られそうなんなのに、それがそっくり

手つかずで残ってる」

ジャスミンがずばりと訊いた。

「代わりに何を手放した？」

むつつりと押し黙ったディアスの表情を見れば、素直に話すつもりがないのは明らかだった。

実力行使でしゃべらせることもできるはずなのに、ジャスミンは意外な提案をした。

「お父上の飛行服はまだおまえが持っているな？」

それをわたしが買おうじゃないか」

ディアスの表情が初めて真摯なものになった。

「……何だって？」

ケリーがジャケットの内ポケットから携帯端末を取り出してジャスミンに渡す。ジャスミンはそこに数字を打ち込んでディアスに見せた。

「これでどうだ？」

端末画面を見たディアスは驚いた。

中止になった競売の最高値と同額である。

ディアスは女以上に金が好きで男だ。さらに夜の

女性たちが見抜いたとおり、あまり賢くもない。

反射的に飛びつきかけたが、自分がジャスミンを嫌っているだけに（間違っても『俺はジャスミンに嫌われているから』ではない。そんな殊勝な神経の持ちあわせはない男だ）一瞬、返事をし損ねた。

それを『疑っている』と見たのか、ジャスミンは携帯端末を取り上げると、新たな数字を打ち込んであらためて提示した。

「不足なら、少しばかり色をつけよう」

今度こそディアスは眼を見張った。

桁が一つ繰り上がって『億』の単位になっている。

あまりに都合がよすぎるくらいは、さすがにディアスにもわかった。疑わしげな顔で質問した。

「……外国人のあんたがなんで親父の飛行服なんか欲しがるんだ？」

「忘れてもらっては困るな。わたしはディアス社の所有者だぞ。我が社は国内有数の飛翔機製造会社で、創設者は国民の誰もが知る有名な飛翔士だ。ならば、

その遺品は自社の記念碑として保有しておきたい。

——そう考えるのはそれほどおかしいことか？」

おかしくはない。至って自然な流れだ。

「競走協会にはわたしから断りを入れておく。我が社が所有すると言え、彼らも引き下がつてくれるだろう。入手した後で、その飛行服を競走記念館に貸与する心づもりがあると言えばなおさらだ」

金額を表示した携帯端末をじっくりとディアスに見せつけて、ジャスミンはさらに畳みかけた。

「おまえの銀行と口座番号は？」

「なに？」

「どこに送金すればいいのかと訊いている。これは送金額制限がない高額預金者専用の口座だからな。

この場で入金してやる」

『今すぐ』『金』『手に入る』。

ディアスの警戒心はこの時点できれいに霧散した。相好を崩して、嬉々として携帯端末を取り出した。「何だよ。あんた、意外に話がわかるじゃないか」

「現物は今どこにある？」

「銀行の貸金庫さ」

笑み崩れながら、ディアスは端末から預金口座を呼び出してジャスミンに見せた。

「ここに金を送ってくれたら、すぐにでも貸金庫の暗証番号を教えてやるよ」

「いいとも。——おまえが話を聞かせてくれたら、すぐにでも送金してやる」

ジャスミンは赤く染めた爪で何気なく携帯端末を弄びながら、にんまりと笑って同じ質問をした。

「株の代わりに何を形にした？」

ディアスはいやそうな顔になったが、何しろ眼の前に大金がぶらさがっているのだ。答えないという選択肢は彼にはありえなかった。忌々しげに言った。

「親父の遺品の一つさ。装飾品だよ」

ジャスミンもケリーも訝しげな顔になった。

「それ一つだけか？」

「高価なものなのか？」

ディアスは首を振った。

「いや、ただの合金製。大きめのメダルっていうか——ペンダントだな」

「写真は？」

「探せば親父がつけてるのがいくらでも出てくるさ。大角羊ビッグホーンの浮き彫りのでかいやつ。親父はあれを気に入って、よくつけてたんだ」

ジャスミンは携帯端末を操作して、ブラケリマの情報網に接続し、画像を探してみた。

なんとと言っても地元ではたいへんな有名人である。ビッグホーンビッグホーントーニの名前で検索すると、山ほど

画像が出てきた。息子とはあまり似ていない。

飛翔士フライヤーはそもそも小柄こがらなほうがいいとされている（ジャスミンは例外中の例外だ）。

初代ディアスもがっちりした体格で、頭は丸く、首は太く、手足も短いのが写真でもよくわかる。

息子との共通点は浅黒い肌くらいだ。

現役時代の初代の写真はビッグホーン大角羊の紋章エンブレムを胸に縫い

取った紫の飛行服を着ているものが多かった。同じ大角羊ビッグホーンを意匠デザインしたヘルメットを片手に持っている。

何とも派手だが、これは他の飛翔士フライヤーも同じことで、飛行服とヘルメットで誰なのかを判別できるように、意図的に目立つようにしているのだ。

しかし、これではペンダントが確認できない。

ジャスミンは引退後に絞って探してみた。

「……これか？」

ヨットの甲板デッキでシャンパングラスを手にくつろぐ初代が写っている。

暖かい時期なのだろう。初代は白いシャツ一枚をおっているだけだ。そのシャツが大きくはだけて、浅黒い胸に黄銅色おうどうの大きなペンダントが輝いていた。これまた大角羊ビッグホーンの紋章エンブレムが浮き彫りにされている。

直径は七センチほどか、男性用の装飾品アクセサリにしてもかなり大ぶりのメダルである。

ジャスミンはその写真をケリーにも見せ、端末を受け取ったケリーは首を捻ひねった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。